

目次

凡例	xi
第I部 総論	
第一章 「文法上許容スベキ事項」と日本語史	3
はじめに	3
一 〈許容事項〉と『現行普通文法改定案調査報告之二』	4
二 〈許容事項〉の具体的検討	6
おわりに	15
第二章 「近代語」とは何か	21
一 古代語と近代語	21
二 近代語研究の流れ	24
三 近代語関係の学会活動	27
四 近代語研究の目指すもの	28

第三章 古代語の語彙・語彙史

一	はじめに	31
二	古代語の語彙体系	31
二・一	語の出自	31
二・二	語種・品詞と使用頻度	34
二・三	語彙体系とその変遷	35
三	古代語の語構成・造語法	38
三・一	語の派生	38
三・二	接辞の添加	38
三・三	複合語	39
四	語形変化と語義変化	40
四・一	語の変化の要因	40
四・二	語形の変化	41
四・三	語義の変化	43
五	文体と位相	45
五・一	和文語・漢文訓読語・記録語	45
五・二	口語の語彙と文語の語彙	46
五・三	語彙の位相	49

第Ⅱ部 概説

第四章 日本語史・文法史・語彙史・敬語史入門……………55

一 「古代語」から「近代語」へは、いつ、どのように変わったのか？……………55

一・一 日本語史の時代区分とは……………55

一・二 古代語から近代語へ……………56

一・三 分析的傾向の発達……………63

二 古代語で九種類あった動詞の活用形式が、現代語では……………65

なぜ、どのようにして五種類になったのか？……………65

二・一 古代語と現代語の活用体系……………65

二・二 連体形終止法の発達について……………67

二・三 二段活用的一段化……………68

二・四 まとめ……………70

三 古代語の推量の助動詞「らむ」、「けむ」、「まし」、「めり」などは、……………72

なぜ現代語には残らなかったのか？……………72

三・一 古代語の推量の助動詞の多様性……………72

三・二 推量と意志……………73

三・三 現在や過去の事態の推量……………76

三・四 推量表現と当為・適當表現……………78

四	古典（文語）文法の「已然形」は、現代語（口語）文法では、 なぜ、どのようにして「仮定形」と呼ばれるようになったのか？	81
四・一	仮定形と已然形	81
四・二	条件表現の分類、用法	83
四・三	古典文法における「未然形＋バ」と「已然形＋バ」	86
四・四	「已然形」から「仮定形」へ	87
五	「知らざあ言つて聞かせやしよう」（歌舞伎「白浪五人男」）の「ざあ」とは何か？	90
五・一	「ざあ」とは何か	90
五・二	上代の「ずは」の解釈	91
五・三	「ずは」の歌の解釈	92
五・四	「ずは」、「形容詞連用形＋は」の確認	94
五・五	「ずは」から「ずば」へ	95
六	形容詞の否定表現「山高からず」は、どうして現代語では 「山が高くない」と言うようになったのか？	97
六・一	形容詞の否定表現	97
六・二	「あり」、「なし」の機能と分類	98
六・三	上代・中古における「あらず」、「なし」の用法	98
六・四	中古和文における補助用言「なし」	100
六・五	中世の変遷過程	103

七	「飛び上がらんばかりに(驚いた)」は、飛び上がりそうになったのか？	112
七・一	問題の所在	112
七・二	国語辞典の記述	112
七・三	「ンバカリ」の解釈	113
七・四	「ヌバカリ」など諸形式の成立と発達	115
七・五	近代語における「ヌバカリ」、「ンバカリ」など	120
七・六	「ムヴン」、「ヌヴン」の変化による同音衝突	123
七・七	おわりに	124
八	頭部をさすことばには、なぜ「あたま」のほか	126
	「かしら」、「こうべ」、「くび」といろいろあるのか？	126
八・一	頭部をさすことば	126
八・二	頭部をさすことばの消長	127
八・三	口語語彙の「アタマ」と文語語彙の「カシラ」、「カウベ」	129
八・四	まとめ	132
九	「真つ赤な嘘」は、本当に嘘が赤いのか？	133
九・一	「真つ赤な嘘」とは何か	133
九・二	「まっかな嘘」と「まっかいな嘘」	134
九・三	マッカヘサマ、マツカイサマ	136
九・四	マツカイナの成立と意味の変容	139

十	敬語「おっしゃる」、「いらっしゃる」は、どのようにしてできたことばか？	144
十・一	「言う」の尊敬表現	144
十・二	「おっしゃる」の成立	144
十・三	「いらっしゃる」の成立と発達	147
十一	デス・マス体は、いつから、どのようにして広まったのか？	151
十一・一	問題の所在	151
十一・二	敬語の分類（素材敬語と対者敬語）	151
十一・三	丁寧表現の歴史	152
十一・四	デス・マス体の成立と発達	156
十一・五	形容詞につく「デス」	157
<p style="text-align: center;">第五章 日本語についての基礎知識とその指導</p> <p style="text-align: center;">—— 歴史・特色など ——</p>		
一	日本語の歴史	161
一・一	日本語の系統	161
一・二	古代語から近代語への流れ	162
二	日本語の特色	172
二・一	音韻に関して	173
二・二	文字・表記に関して	173

二・三	文法に関して	174
二・四	語彙・文体に関して	175
三	日本語の歴史・特色などの指導	177

第六章 中世語の世界

——	中世語資料としての狂言台本	179
一	狂言のことば	179
二	狂言台本の公刊状況	180
三	大藏流の台本に関して	181
四	和泉流及び鷺流の台本に関して	185
五	版本狂言記に関して	189
六	おわりに	190

引用・参考文献	193
---------	-----

第三部 学界展望

「国文学 解釈と鑑賞」第三十三卷十号〈通巻第四一〇号〉	205
「国文学 解釈と鑑賞」第三十三卷十一号〈通巻第四一一号〉	212

「国文学 解釈と鑑賞」第三十四卷一号〈通卷第四一六号〉	219
「国文学 解釈と鑑賞」第三十四卷三号〈通卷第四一八号〉	226
「国文学 解釈と鑑賞」第三十四卷四号〈通卷第四一九号〉	233
「国文学 解釈と鑑賞」第三十四卷六号〈通卷第四二二号〉	240
「文学・語学」第115号	246
「文学・語学」第146号	264
「国語学」第193集	267
「国語学」第52卷3号〈通卷206号〉	287

第IV部 書評

蜂谷清人著『狂言の国語史的研究——流動の諸相——』	291
出雲朝子著『中世後期語論考』	297
染谷裕子著『お伽草子の国語学研究』	307
山口明穂著『日本語の論理——言葉に現れる思想』	316
金水敏著『日本語存在表現の歴史』	318
金水敏・乾善彦・渋谷勝己著『シリーズ日本語史4 日本語史のインタフェース』	320

第V部 エッセイ

日本語史からみた「恋」「愛」「恋愛」	325
日本語の魅力 多彩な挨拶のことば	329
「日本語学」名著との出会い	332

第Ⅵ部 小林賢次著 「はじめに」「あとがき」 集成

『狂言台本とその言語事象の研究』 「あとがき」	339
『日本語史の新視点と現代日本語』 「序」「編者あとがき」	344
『中世語彙語史論考』 「あとがき」	351

第Ⅶ部 小林賢次著述目録

「日本語の研究」第9巻4号「小林賢次博士追悼特集」	357
---------------------------	-----

第Ⅷ部 辞書・辞典・事典等項目執筆目録

【項目のみ掲載】

『古語大辞典』	371
『日本古典文学大事典』	371
『日本語文法大辞典』	371

『日本語表現・文型事典』……………	371
『日本語学キーワード事典』……………	372
『日本語学研究事典』……………	372
『日本語文法事典』……………	372
『日本語大辞典 上下』……………	372
『日本語学大辞典』……………	372
【全文掲載】	
『何でもわかることばの知識百科』第一部 日本語の知識……………	373
「言語」第28巻5号〔通巻322号〕特集…手のひらの言語学……………	
日常言語をめぐる22の疑問に答える……………	387
『問題な日本語——どこがおかしい？ 何がおかしい？』……………	393
『続弾！問題な日本語——何が気になる？ どうして気になる？』……………	406
『問題な日本語 その3』……………	419
『問題な日本語 その4』……………	429
『敬語の事典』……………	439
所収論文の掲載書籍・雑誌一覧（第六巻）……………	447
本書所収の論文解説と未来への展望……………	449
賢草日本語研究会より御礼のことば……………	459
梅林 博人……………	

凡例

- 1 研究書として刊行されたもの（「初版本」と称する）を根幹に、既発表論文を研究テーマごとに巻を分けて構成している。
- 2 初版本の論文体裁を尊重しており、編者の統一は、【注】表示のあり方など、ごくわずかである。
- 3 編者の統一を控えた理由は、三〇〜四〇年にわたる研究論文執筆において、論題や扱う資料によってその文体や表示面に変容が生じるのは自然の流れであると考えられるからである。また、機械的な統一によって、その論文本来のもつ「調和」をそこないたくなかったからでもある（ただし、数字の表記方法など最低限の統一については、読みやすさを考慮し、編集部のほうで手を加えた箇所がある）。
- 4 ただし、小林賢次は縦書き派であったので、横書き（横組み）で出版された一部の論考については、縦書きに直している。
- 5 引用・参考文献の挙げ方にも、古いものと新しいものとは変容が生じているが、初出、あるいは、初版本のままを反映している（ただし、編集部のほうで可能な限り形式の整理をおこなった）。
- 6 初版本に小林賢次自筆の書き入れがあるものについては、「小林賢次自筆書き入れより」という一項目を設けて、参考にする。
- 7 初版本に誤植等、すでに小林賢次によって朱が入っているものは、6の扱いをせず、訂正された形を本文上に反映させている。

